〔巻頭言〕

障害と学校と社会

中　田　英　雄

朝日新聞の声の欄（平成6年11月10日）に次のような記事が載った。障害者を3人もつ親からの投書である。地域の普通中学校に車椅子で通う次男が文化祭に出品するために、両親と一緒に人のお面と電気スタンドを作製し、学校に提出した。ところが学校側は、本人一人で作製したのではないから、出品展示は本人のためにならない、出来ないことを出来るように見せるのはよくない、という。これは親のたっての願いで、校長の許可がおりた。また、去年の校内マラソン大会では父親が車椅子を押して6キロを完走したが、父親が押して走ったのだから認めるわけにはいかないと学校からいわれた。トライアスロン大会でも最近、障害者が参加しているが、それは間違っていると学校からいわれた。親子が協力して一つの作品を手掛けた。出来ないことを出来るように見せようとして作品を作るだろうか。出来ないことを出来るように見せるのはよくない、という意見には確かに一理あるが、この言葉には突き放した、冷たい響きがある。有無をいわせぬ何かがある。この学校ではこどもたちの手を取り、足を取って指導しないのだろうか。宿題を親が手伝うこともある。これは子どもがわからないことをわかったように見せることだろうか。車椅子を父親が押して走ったのだから認められない、という学校の言い分には肌寒いものを感じる。車椅子マラソンや車椅子バスケットボールなどの競技は、今や知られたスポーツである。この出来事に共通するのは、障害をもつ子どもへの理解や認識、柔軟な対応が学校に不足しているということだけではなく、教育というシステムに宿る、かたくなな保守性と異質なものに対する排他性である。このような排他性、つまり同質性を好む傾向は、学校ばかりでなく社会全体に見られる。集団の特性と異なる性質をもつ者を排除したり、特別視する風潮が根強く残っている。これが態度や振舞いとなって、あるいは教育指導という名を借りて障害をもつ人や弱者に向けられるのではないだろうか。この学校はインテグレーションの形態をとってはいるが、本来のインテグレーションにはほど遠い。この出来事は、障害をもつ児童が学校に溶け込んでいない様子や障害をもつ児童を温かく包み込む環境が学校に育っていない様子を端的に物語っている。

同じく声の欄（平成6年11月22日）に、普通学校で学んだ脳性マヒをもつ人の投書が載った。地域の学校で友と学びたいという主旨で、最後にこう結んである。障害児だけをまとめなければ素晴しさが発揮できないほど、現在の学校教育や教師の力量がひ弱であるとは思えません。

しいのみ学園の舟地三郎園長曰く（舟地三郎の世界3、朝日新聞夕刊、平成6年10月5日）。“個別指導の楽しさと言いますか。ぼくは障害児教育こそ教育の原点だと常々思うんですよ。子どもの世界を耕すスリリングな気分。効果が手ごたえとして返ってくるんですよ。子どもに手をつかまれ、「分かった、分かった」と言う顔をされてごらんなさい、もう先生をやめられませんよ”

生まれて一度も靴をはいたことがない、脳性マヒで肢体不自由一級の38歳、車椅子の男性がある競技用のシューズメーカーに製造依頼の手紙を出したところ、快諾を得たとある（毎日新聞夕刊、平成6年11月19日）。この男性は車椅子の生活で小さいころから靴を履くのが夢だったが、足の指が曲がって一部が硬直し、外出するときは靴下だけで、靴は一度も履いたことがない。約一週間後、社員が訪問。足型をとり、本人の好みも聞いて、現在製作中とある。いま企業は利潤追及型から、社員にやさしい、社会にやさしい企業へと変わる努力が求められている。ある複写機メーカーの社会貢献部長の話によると、その企業では全社員が給料の百円単位以下を毎月積み立て、地域の福祉活動などに役立てているという。フィランソロピーとか社会貢献、メセナなどの言葉をしばしば耳にする。学会をはじめ会議や各種のイベントをサポートしている企業は多い。企業の姿勢や行動様式は変わりつつある。個人、学校、企業、そして社会が高いQualityをもち始めたことを実感できる新聞記事がほしいと思う。ともあれ、世界に一つしかない靴の完成を待ちたい。